学位論文審査の要旨

学位申請者	松永　典子 2009年3月単位修得退学	論文題目	参政権達成後のイギリス文学と働く女 ――ポストサフラジズム／ポストフェミニズムの系譜
審査委員	主　　査: 戸谷　陽子　教　授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否　：　否
	副　　査: 松崎　毅　教　授		「否」の場合の理由
	副　　査: 高桑　晴子　准教授		□ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員: 谷口　幸代　准教授		□ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員: 大田　信良　教　授 （東京学芸大学）		■ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博　士　（人文科学）		■ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
（英語名）	**(Ph. D. in English Literature)**		□ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
学力の確認	学力確認のための試問は、経歴及び業績の審査をもって代える。		※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本研究は、女性参政権獲得後のイギリス文学におけるフェミニズムの叙述の検討により、20世紀以降のイギリスにおけるフェミニズムの概念形成とその過程を再解釈するものである。本学位請求論文は、第一次世界大戦前後に定着したフェミニズム（参政権を含めた女性の権利獲得運動）を第一波、第二次世界大戦後のウーマンリブ運動を第二波、1990年代以降をポストフェミニズムとするフェミニズムの歴史における定説を、イギリス文学・文化表象を対象に再検討することで、20世紀以降のイギリスのフェミニズム文学とその問題を連続体として捉えることを提案する。フェミニズムを否定するかに見える新自由主義下の働く若年女性をめぐる叙述に、抵抗の文化や価値転覆可能性を読みとる近年のポストフェミニズム研究の成果を発展させ、女性参政権が実現した20世紀初頭にまで遡ってフェミニズムの成功と失敗の歴史を検証しつつ、「ポストサフラジズム」として働く女性の文化を考察する本研究は、フェミニズム研究の在り方を大きく更新するものである。論文全体は序論・本論（Ⅲ部）・結論から成る。

序論では、第二波フェミニズムを頂点、ポストフェミニズム以降を停滞期とする従来の解釈の図式は、参政権獲得以降のイギリス文学・文化表象が差異や対立を内包する働く女の表象から成り立つことに着目し、これを分析することで、再解釈しうるという本論文の主張と目的、方法論が提示される。

第Ⅰ部は、20 世紀から21 世紀にかけての複数の時代の自伝的語り（1930年代の女性知識人作家による労働者階級女性への「手紙」、1970年代のウーマン・リブの文学「意識高揚小説」、1990年代の大衆文学「チック・リット」、2000年代の女性人気ライターのエッセイ）におけるフェミニスト的なアイデンティティの生成過程を検討する。また、バーナード・ショーの『聖ジョーン』を女性参政権獲得運動の後という時代のヒロインとして読み解く。いずれの時代にも差異を抱える女たちを集結させるユートピア的シスターフッドを希求する瞬間が描かれるにもかかわらず、このフェミニスト的なモメントは20世紀前半からすでに繰り返し失敗や中断という結末に至っていたことが確認される。

第Ⅱ部では、第一次世界大戦の従軍女性を描いたミドルブラウ小説の分析により、家事と育児のワーク・ライフ・バランス、女にとっての労働の意味等、ポストフェミニズムにつながるテーマが早くも戦間期に描かれていたこと、とりわけ1990年代以降ポストフェミニズム下に顕著な若年女性の「すべてをもつ」女への希求は、20世紀初頭にはすでに見られ、ポストフェミニズム小説群「チック・リット」小説の原型として再解釈しうることが指摘され、ポストフェミニズムの時代区分が再検討される。

第Ⅲ部では、20世紀初頭にポストフェミニズム的萌芽が存在したにもかかわらず、議論されてこなかった事実を、ミドルブラウの女性が、大衆にも知識人にも分類されなかったことで、フェミニズム文学の担い手としての議論が欠落したためと位置づけ、20世紀初頭のアール・デコの生産と受容を例に、産業の変化が労働者階級にもたらした肉体労働から事務職への職業上の変化とともに、知識人たちの労働者に対する眼差しをも変化させたことを確認する。

結論では、上記の総括に加え、今後の課題が論じられる。

審査委員会は12月20日、1月28日（オンライン）、2月13日（書面）、2月17日に行われた。審査では、フェミニズムの波間に断絶よりは連続性を認め、労働の諸条件、新自由主義とメリトクラシー、メランコリー、ミドルブラウ等の概念枠を導入しその相関を検証してフェミニズムの歴史を語りなおす方法論が、論文筆者の歴史に関する詳細な知識と明確な立場性に立脚したものであると高く評価された。その上で、対象とする「テクスト」の定義と選択した対象作品の根拠を明確に説明し、「テクスト」分析の部分に厚みを加えること、連続性の議論により従来とは異なる独自の視点を提供するという論旨を明確に分節化すること、配置される批評理論との整合性を緊密にすること、第Ⅲ部トランスジェンダーの処遇についての理論的考察を整理することなどが求められた。これらの指摘に対し申請者は真摯に修正を行い、審査委員会は適切に修正がなされたことを確認し、2月17日に公開発表会を実施した。申請者は論文の概要をわかりやすく説明し、その後の質疑応答には丁寧に回答し、また当該分野の専門家の聴衆によるコメントに対しても的確で論点を絞った議論で応答、充実した議論を展開した。公開発表後に実施された最終審査では、審査委員会の指摘に基づき修正した内容および公開発表会での発表・質疑応答の内容が審査された。その結果、本研究が、従来肯定・否定のいずれかで論じられてきた20世紀以降のイギリスのフェミニズムの概念形成とその功罪を、文学・表象文化において包括的に再検討する研究であり、今後のフェミニズム研究に新たな視点を提供する重要な研究であると高く評価し、審査委員全員の一致した意見により、博士（人文科学）(Ph. D. in English Literature)の学位に相当すると判断した。